

泉鏡花「年譜」補訂(九)

吉田昌志

本稿は、先年刊行した岩波書店版『新編泉鏡花集』別巻二(平成十八年一月二十日)収録の泉鏡花「年譜」の補訂で、本誌七九五号(平成十九年一月一日)掲載の「補訂(一)」、七九七号(平成十九年三月一日)掲載の「補訂(二)」、八一九号(平成二十一年一月一日)掲載の「補訂(三)」、八二二号(平成二十一年三月一日)掲載の「補訂(四)」、八二六号(平成二十二年八月一日)掲載の「補訂(五)」、八四三号(平成二十三年一月一日)掲載の「補訂(六)」、八四五号(平成二十三年三月一日)掲載の「補訂(七)」、八五〇号(平成二十三年八月一日)掲載の「補訂(八)」に続くものである。

内容は、「誤記・誤植の訂正」、「本文の訂正・追加」、「典拠の訂正・追加」、「新たな項目」、の四部に分ち、書式を次の通りとする。

- 一、表記は、原則として右「年譜」に準じた。
- 一、「年譜」本文の後に、【典拠】として、文献の原文、未公刊資料の翻字等を示し、典拠が複数の場合は番号を付して併記した。【注記】の項には、内容の解説、考証等を記した。
- 一、引用文の仮名づかいは、原文のままとし、字体は概ね現行の印刷文

字に改め、読解に必要なルビを残した。

- 一、引用文の中略部分は、総て「(…)」で示し、前略、後略はいちいち断わらなかつた。引用中の誤記・誤植は、「」内に補正した。

- 一、典拠文献が複数項目に重出する場合も、そのつど項目ごとに示して、書誌的事項の記載を省かなかつた。

- 一、「本文の訂正・追加」では、訂正部分、新たな追加部分に傍線を付して区別した。

- 一、文中の敬称は、原則として省略した。
- 一、必要に応じて、「*」のあとに注記事項を補った。

【誤記・誤植の訂正】 * ↓の下が正しい。

補訂(一)

- 61頁上段8行目 昭和十三年 ↓ 大正十三年

補訂(七)

- 61頁上段11行目 大正六年 ↓ 大正五年

「新たな項目」

明治四十一年（一九〇八） 戊申 三十六歳

三月 十九日付「国民新聞」（四面）掲載「文界の一大計画」で、博文館による「二十一家」の「明治小説家全集」の企画が報じられた中に、鏡花の名があった。この企画は三年後に「名家小説文庫」第十編『鏡花叢書』（明治四十四年三月二十三日刊）となって公刊された。

【典拠】「文界の一大計画／二十一家の全集編纂」（「国民新聞」明治四十一年三月十九日付・四面）

明治作家中の大家の作物は多く死後になりて一部に纏められ全集として出版せらるゝが常にて夫も今日まで纏りたるは僅かに思軒、紅葉、透谷、一葉、薄氷、賤子、新二の諸文人に過ぎざるが今回書肆博文館にては明治小説家全集なる大出版を企て露伴、篁村、柳浪、眉山、麗水、南翠、得知、秋聲、天外、春葉、霞亭、水蔭、美妙、魯庵、鏡花、四迷、花袋、風葉、桜痴、洪柿、嵯峨の屋等二十一氏の博文館の出版物「太陽」、「明治文庫」、「小説文庫」、「文芸倶楽部」其他単行物の新旧作物一切を網羅し一冊一千頁以上のものと為し毎月一回位の程度にて出版する計画あり始めて此案を起したるは昨年十一月にて其後齋木菊雨氏主任となりて原稿の取集めに従事したるが何分十数年に亘れる作物とて其の蒐集の困難一方ならず目下五人の助手を督して淨写其他に従事し居れるが一体が大仕懸の計画として一般の方針容易に定まらず未だ秘密にして公に発表せざる為め網羅さるべき作家さへも未だ此挙を知らざるもの多しと云ふ聞く所によれば江見水蔭氏のは自身編集して持ち来りし為之のみは整ひ居るも其他は漸く著手したるのみ第一巻は露伴氏か二葉亭氏の出すべく形は菊版にて帝国文庫風の叢書となし作物の順序は年次により

体裁用紙等極めて力を入れたるものなるが此の他にも前者に残れる閩秀作家、新進作家の作物及び脚本等を各一纏にして其の集に次ぐやも知れず兎に角五六月頃まで「に」は大体の順序方針もどうにか定まる由なれば世間に発表の運びに至るべきか題は一先づ明治小説家全集と定め置きたるも又た何とかわるべき由猶ほ今日の作家にて己が昔よりの著作を悉く集め置くは殆んど無く最も多作を以て聞ゆる柳浪氏の如きは古き自作の名さへも忘れ居り人言はれて其様ものもあつたかと答へる始末なれば文学の嗜みある同氏夫人は遺憾に思ひ門弟と共に古本屋を求食りて柳浪氏の旧作を買集むるに盡力したれど漸く三分の二を得るに過ぎざりしと云ふ、次に此の全集には雑誌掲載の折々に掲げたる挿絵は大抵省き其代りに作者執筆の自伝と肖像を掲載すべき予定にて売行きの如何に關らず万事明治文学史の記念物として明治四十年までの作物全集として恥かしからぬ立派な者になさんの意気込なる由明治の文界に忘る可らざる一大計画と云ふべし

【注記】

当時の出版事情が良く窺えるため全文を引用した。

「名家小説文庫」の第一編・第二編は『露伴叢書』前編（明治四十二年六月十五日、九七二頁）、同後編（同九月二十日、九八二頁）で、七年前に刊行した一卷本の『露伴叢書』（同三十五年六月十八日、一八八〇頁）をもとに二分冊にしたものだから、編輯にさして困難はなかつたろう。以下、第三編『洪柿叢書』（同四十二年十二月三十一日、一〇〇六頁）、第四編『柳浪叢書』前編（同、一〇〇三頁）、第五編同後編（同四十二年六月十六日、一〇一九頁）、第六編『花袋叢書』（同六月二十日、一〇二九頁）、第七編『水蔭叢書』（同八月十八日、一〇一〇頁）、第八編『小波叢書』（同九月二十八日、一〇三六頁）、第九編『秋聲叢書』（同四十四年二月八日、九九四頁）、第十編『鏡花叢書』（同三月二十三日、一〇二八頁）、第十一編『美妙叢書』（同八月二十三日、一〇二八

頁)、第十二編『篁村叢書』(大正元年九月十日、九九六頁)の全十二巻である。

予告「二十一家」のうち、以上の十大家にとどまったが、ほぼ「一冊一千頁以上」「挿絵は大抵省き」「作者執筆の自伝」を掲げるといふ体裁は実行された。

編輯者として名の挙っている齋木菊雨は、本名寛直、『博文館五十年史』(昭和十二年六月十五日)によれば、明治三十九年四月二十四日にいったん退館したものの、同年十月に再び入館、四十一年「冒險世界」創刊に当って主任押川春浪の助手を務めた、とある。

この博文館の「名家小説文庫」の菊判大冊に対抗し、春陽堂からは袖珍本(三五判)の『紅葉集』全四巻(第一巻は『露伴叢書』前編刊行の翌々月の四十二年八月)を始めとして、『鏡花集』全四巻、『美妙集』、『露伴集』全二巻、『風葉集』全二巻、『桜痴集』(全三巻予定のところ)二巻、『洪柿集』全二巻を順次刊行した。

なお、『鏡花集』に関しては、当初第一巻(四十三年一月一日刊)の見本組(初校)段階の題名が「銀鈴集」であったことを示す資料が残っている(現岩波書店蔵。「年譜」同日の項を参照)。命名はおそらく鏡花の発意であろうが、先行の『紅葉集』に合せて、個人名を冠した袖珍本全集へと編入されたわけである。その後「銀鈴集」の名は、翌四十四年十月十日刊の隆文館の単行本の題名となった。

明治四十二年(一九〇九) 己酉 三十七歳

一月 七日付「読売新聞」(五面)の「文壇はなしだね」に原稿執筆にまつわる話が紹介された。

【典拠1】「文壇はなしだね」(「読売新聞」明治四十二年一月七日付・五面)

●泉鏡花氏は原稿紙に向ひ、やをら筆を執つて墨を落すといふ場合には、必ず先づ端然と居ずまひを正し、それから潔めの水を蒔くといふ様な事をする相だ、之で作物に神秘的処があるのだ。

【典拠2】S T生「著作の泉鏡花」(「中央公論」二十一年二号、明治三十九年一月一日)

△水入

此の父母にして、此の児あり、此の先生にして、此の弟子あり、然かも彼の作物ありで。(…)

旧は主に夜であつたが、近頃は昼間も書く。書齋は六畳一間限、障子に面して机が置いてある。而して其の前に小庭がある、毘沙門様の縁日で買集めた秋の七草を始め、春夏の草花を色々、硝子越に熟と見られる。

机の右傍に籠火鉢があつて、メリンスの座蒲団が二枚、其へ坐つて、刻菫——旧は雲井、近頃はさつき巻菫は外出の時でもなくては吞まず——先づ香を一燃して其香の燻る頃、机の上の硯を取つて火鉢の上へ持つて行くと、水入の水を硯に注ぐ(蓋し、水入は一本二錢五厘か三錢ぐらゐの青い色をした御神酒徳利。いはれば別になし、先生の玄関時代から使つてゐると云ふ事)清めるので、火鉢の火がじゆうと云ふと、又机の上に置く。

それから、筆、墨、同じく清める。清めて後、机に向ふ。

墨は余り濃く摺らず——或は摺つて居られないのかも知れぬ。

驚破や、好き敵(たぐひ)さんなれと見ると、瞬く内に一枚二枚、三枚、四枚。五枚、六枚、七枚、八枚。一夜の内に幾十枚!。(…)

弥よ懸らうといふまでには、十日も二十日も打遣つて置く事があり、又一枚書いた限、いつまでもく机の上に乗せてある事があるとの話。

短い物なら一枚、二枚、長い物なら一回、二回が一番書辛い処なので、最初の日は一回書き、次の日は二回書き、四回書き、八回書く、と先づ恁云ふ順序。

恁で仕上げた品物は、短篇となく、長篇となく、必ず原稿の何れかに雨じみのやうな跡があるが、是は所謂蕪村の句に——名人は名人を知るで——

雲舟が蠅打払ふ硯哉

鏡花氏も無意識ながら蠅或は虫などのとまった折に彼の水入の水を注いで
原稿を清めるのである。(未完)

【注記】

典拠2の著者「ST生」は、鏡花の門人寺木定芳（明治十六年二月十八日生、昭和四十七年十一月三日歿、享年九十。生歿は鈴木祥井『寺木だぁ！』財団法人 口腔保健協会、平成二十一年五月二十日、に拠る）が有力だが、鈴木著には、寺木が明治三十七年から四十一年まで渡米していたとの記述がある。しかし、後藤宙外書簡（明治三十六年十二月十一日付）には「友人寺木子このたび米国に渡航いたし候につきホンノ原口弟など内端だけにて今晚常盤に参り候」とあって、当日「原口」春鴻、「弟」斜汀らとともに牛込常盤亭（神楽町三丁目）で送別の宴をしたことが判るので、渡米は三十六年十二月とすべきであろう。村松定孝『あぢさる供養頌』（新潮社、昭和六十三年六月五日）は、宙外書簡を見ていないが、生前の寺木からの聞書として、渡米期を三十六年から四十年までと記している。

いずれにしても、三十九年年頭に寺木は在米中であって、米国から原稿を送ることも全く不可能ではないが、寺木でないとすると、実弟泉斜汀が想定される。

「ST生」という署名とも矛盾しないし、また当時は神楽町の鏡花留守宅に居り、外地の寺木よりもはるかに原稿を書きやすいからである。

本文は二回連載で、第一回は前年十二月号（二十年十二月号、明治三十八年十二月一日）。初回の前文に「本号には鏡花氏の苦心談を掲載する筈なりしも氏微恙ありて果たさず、鏡花氏と懇意なる某氏の此篇を以つて之に代ふ」とあって、その執筆事情が明らかとなる。この「微恙」は、三十八年夏以来の逗子滞在の因由でもあろう。

第一回は「机」「硯」「筆」「墨」「紙」「罌紙」、第二回は「硯蓋兼墨置」「筆置」

「文鎮」「水入」の各章から成る。「懇意なる」者ならではの視点から、本人の苦心談ではなかなか語りがたい文房具や執筆の様態を叙して貴重な証言となっている。続いて「はなしだね」にも紹介され、その後鏡花の執筆上の「儀式」として有名になったエピソードは、この「著作中の泉鏡花」を淵源とするのではなからうか。また、田中純（幸福な作家泉鏡花）『作家の横顔』朝日新聞社、昭和三十年七月十日）は「若い頃には塩を一つまみ振りかけたという話だった。」とも伝える。大正四年以降「新小説」編輯者として鏡花と交渉のあった田中の言であるが、真偽のほどは確かめられない。

なお、典拠2文中の「青い色をした御神酒徳利」と「雨じみのやうな跡がある」自筆原稿（ともに慶応義塾図書館蔵）の写真は平凡社版『別冊太陽 泉鏡花』（平成二十二年三月二十二日。一〇二―一〇三頁）に収められている。

明治四十二年（一九〇九） 己酉 三十七歳

四月 十五日付「読売新聞」（五面）の「文壇はなしだね」に、牛込時代、
巡査から不審な人物と疑われた逸話が紹介された。

【典拠】「文壇はなしだね」（読売新聞）明治四十二年四月十五日付・五面

●鏡花氏といへば昨今の人でないからその朝寝坊位は知る人には大分知られてるでもあらうが、それが頗る罪な事を仕出かした話を聞いた、牛込の何処ぞに新任の査公があり、此奴頗るの勉強者で、適れ新任の御手柄をやり、署長殿の御覚えも目出度からしめんと焦慮つて居た処、或る夜の事、四隣寂として寝静まつて、世は暗黒の衣きぬに包まれ果た真夜中過ぎ、はて首の傾く。日頃巡回の折に目に着いて居た華奢な構かま、板塀越にオイと呼べば、内から艶あだしい声でオヤマアと媚なまめいた姿の後れ毛を搔いて見え相な、見越の松に雪洞の影の揺る、てつきり鏡花式の小説に有り相な、とは一寸書き過ぎだ、査公の

胸には斯う迄の気付きもなかつたらうが、兎に角艶々と覚えて居た処へ来ると、此家のみは夜を昼なる洋灯の火影が堀越に流るゝ、足を側めて立寄り様耳を澄ますとヒソ／＼声、それに唯ならぬ婀娜めく女の声も交る、ハテと不審を打てば又思ひ当る、日出で、三平容易に朝戸を開けぬも此家、「よしッ、睨んだぞ乃公の眼に」と、此夜を初頭として非番も何も構はばこそ、独り功名の気で夜な／＼御苦勞にも不眠不休の警察眼の本領を愈よ此処で發揮する事にした、所が此事何時か知ら署長殿の耳に入つて訊き糺されると、実は此れ／＼斯う／＼と、余程の見付けものでもした様な元気で洩す、と署長殿それを全然茶々無茶にした様な底抜け笑ひ、「あれは君泉鏡太郎といつて何でも有りやしない、近頃売れつ子の小説家鏡花の事さ」、査公暫く開いた口が塞がらず、苦笑して引下つたといふ事だ、蓋し鏡花氏の癖として夜更けてのみ筆を取り、夜を明かす事も珍しくない、従つて又午前中は丸々寝るといふ様な事もするそれが祟つたと云ふ訳だ相な。

【注記】

この逸話の時期はよく判らないが、友人谷活東の遺稿「七夕の夜」(「新小説」十一年八卷、明治三十九年八月一日)中に、「前に泉君が牛込警察署の探偵に、甚く疑ぐられて居たさうで、読売新聞にも其事が出て居た。」とある。活東のいう「読売新聞」の記事を確認できていないが、右「文壇はなしだね」は同紙二度目の報道ということになる。

鏡花の牛込南榎町在住は、明治三十二年秋(九月二十三日以降)から三十六年一月二十二日までであるから、この間の出来事になる。

谷活東「七夕の夜」をめぐる交流に関しては、「補訂(八)」の明治三十三年七月七日の項を参照。

明治四十二年(一九〇九) 己酉 三十七歳

五月 一日より十九日まで、京都明治座で伊原青々園作「吉原新比翼塚」へ鏡花作「湯女の魂」を嵌め込んだ「吉原雀」(並木萍水・岩崎蕪花脚色、六幕十六場)が上演された。配役は、銀行員小野輝爾、秋月桂太郎、彦多楼娼妓九重、喜多村緑郎、農学校会計筑紫晋一郎、小織桂一郎、銀行重役小野隆、熊谷武雄、苦学車夫田上眞砂男、静間小次郎、輝爾の妻操子、丸山操、陸軍少佐比企基安、悪漢三椒大夫の銀蔵、福井茂兵衛、眞砂男の妹お妙後に芸妓小雛、英太郎ほか。

【典拠】 花柳章太郎「初恋あやめ浴衣」(『女難花火』雲井書店、昭和三十年六月十日再版。*初版には刊記なし)

大阪へ行つた伊井、喜多村、村田、井上の一座は、「不如帰」と一の替りに「女夫波」「海潮音」を出し、四月に師匠だけ、その頃頭角を現はしかけて来た京都の興行師大谷竹次郎さんに招かれ、新京極の明治座へ出勤することに決まりました。三月の月末、師匠喜多村から手紙で、四月の京都興行から自分の手許に来るやう言はれ、改めて私も小学校を卒業しましたので、共に京都へ参らなければならなくなりました。(…)

秋月、小織、福井、静間、それに喜多村を加へた顔触れで、狂言は「俠艶録」の通しでした。(…)

四月興行が当たつたので、五月の芝居もそのまゝの顔振れで、替りを打つことになりました。

泉鏡花の「湯女の魂」を伊原青々園の「吉原心中」へ嵌め込んだ「吉原雀」といふ芝居。師匠は花魁で、大蝙蝠に悩まされる、宙乗りなんかがある「けれん」ものでした。

【典拠2】「劇界」(「日出新聞」明治四十二年四月二十九日付・七面) *□は欠字。

▲明治座 今回の狂言「吉原雀」の場割は左の如し

序幕(吉原尾彦楼廻し部屋、亀井戸神社内茶店、外神田小野邸勘当) 二幕
目(根岸農学校宿直室、同運動場、同門前) 三幕目(龍泉寺町裏長屋、橋場
比企家別荘) 四幕目(尾彦楼九重部屋、夢の廊下、同□茅ヶ原一つ家、元の
部屋、大広間愛想づかし) 大詰(同楼離座敷大久保躑躅園□)

【典拠3】「劇界」(「日出新聞」明治四十二年四月三十日付・七面)

▲明治座 本日開場の筈の処都合に依り一日日延べ愈々明日開場と決した
るが初日に限り例の如く各等半額にて而かも総幕出揃はず筈なりと「吉原雀」
の役割は左の如し

陸軍少佐比企基安、悪漢三椒太夫の銀蔵(福井) 苦学車夫田上眞砂男(静
間) 農学校会計筑紫晋一郎(小織) 彦多楼娼妓九重(喜多村) 銀行員小野
輝爾(秋月) 眞砂男の母お仙(金泉) 銀行重役小野隆(熊谷) 農学校職員
杉浦啓作(高部)(…) 眞砂男の妹お妙後に芸妓小雛(英)

【典拠4】八重雄「明治座の「吉原雀」(上)」(「日出新聞」明治四十二年五月五日付・
七面)

▲五幕目の作意は重に鏡花子が「湯女の魂」から胚胎して居る、鏡花子作中
の女主人公は喜多村の柄にあるのだから大方喜多村の発意になったものであ
らう▲「湯女の魂」は芝居などでは出来まいと思はれる程幽玄な品作である
にも拘はらず此位にやれば成功の方だ、作者及び喜多村の労を多とする▲多
喜村の九重が夢中蝙蝠に連れられて花道に行き連理引になる科は皆古い事
を新しく見せて居るのが手柄だ苦節の場は無理酒を飲むさまが亦河合と趣が
変つて好い、小織の筑紫と心中ならぬ背中合せの自殺は一寸目新しく凄惨
だった、着附も凝りやの事だから種々に変つて好い殊に蝙蝠の模様を着附は

実に凝りに凝つたものだった

【典拠5】「劇界」(「日出新聞」明治四十二年五月二十日付・七面)

▲明治座 昨日打揚げたり

【典拠6】宮島春齋「京の五月芝居」(「歌舞伎」一〇七号、明治四十二年六月一日)

明治座は俳優六十二名に「吉原雀」と題して役々をはめたる新作、薔花萍水
両君の苦心に成り、「新比翼塚」に鏡花子の「湯女の魂」を交へ、高部、英、
大井の青年一派を加へ、喜多村も今一回と引止め、詰らぬ役も面白く躍動し
て居るが、(…)娼妓九重の喜多村は花魁らしく、愛想づかしも実地らしく、
調伏の蛇を見てから夢となるなどは得意のところ。総て全体があまり取合せ
過ぎたる場面ゆゑ、面白けれど味ひ無し。六幕十六場に夜の十一場「時」と
は物騒なる芝居なり。

【典拠7】「各五月芸信」(「演芸画報」三年六号、明治四十二年六月一日)

▲京都(あの字報) 拜啓、花は散りて春は正に暮れ申候、例年本月は五月芝
居とか申し十二月の顔見世と共に当地の芝居月の由承り居候が、今年は只明
治座に新派の大一座が開演致し居り候のみにて其他はさしたる事無之候、同
座顔触れは福井、秋月、小織、静間、喜多村を初め以下六十余人、近来稀に
見る大一座に御座候、狂言は並木、岩崎両氏の合作「吉原雀」にて、これは
「比翼塚」を土台とし「今戸心中」「湯女の魂」などを加味せしものと、花
魁九重を中心としてそれに種々の人物を搦まし頗る面白く出来上り居り候、
され共人気宜しき方にては無之候、

【注記】

喜多村緑郎入門直後を回想した花柳章太郎の文をもとに、上演の実態を把握す
ることができた。

明治四十一年に門下となった花柳は、翌年三月小学校を卒えるとすぐ喜多村に

呼ばれて京都に赴き、四月の明治座「俠艶録」で当地の初舞台を踏んだのだが、「吉原雀」前後の興行の役割が記されているのに、この舞台の役には言及が無いから、おそらく出演に至らなかったであろう。

上演の主筋となった「吉原心中」は、「吉原新比翼塚」と題して「都新聞」（明治三十四年四月二十二日―二十六日）に連載された青々園の作を、連載途中の七月に澤村源之助が宮戸座（十二日初日）で、伊井蓉峰が演伎座（十四日初日）で、さらに水野好美が常盤座（二十九日初日）で、それぞれ「新比翼塚」として上場した演目である。当時の幸堂得知の劇評（東帰坊「演伎座劇評（夜の部）」「東京朝日新聞」明治三十三年七月三十一日付・三面）にその粗筋が（□は欠字）、

此「新比翼塚」は丸山作楽□「が」朝鮮事件より始り遊女雲井が異腹の兄に苦界を救ひ出され中島座付芝居茶屋の女将と成りてより俳優に欺されて借財に苦しみ其上道路にて彼俳優に侮辱され口惜しさのあまりにお茶の水へ投身するを土屋といふ書生に救はれ其後再度吉原品川楼に身を沈め谷豊榮に馴染を重ねて遂に相対死をする

と紹介されている。

右「新比翼塚」を骨子とする「吉原雀」の筋立ての全容は把握しがたいが、典拠7によると、「湯女の魂」ばかりでなく、広津柳浪作「今戸心中」をも取り入れた劇であったことが判る。典拠4の劇評を手がかりにすれば、「湯女の魂」（「新小説」五年六巻、明治三十三年五月五日）を締め込んだのは五幕目、「夢中蝙蝠に連れられて花道に行き連理引になる」場であり、全十九章のうち十四章以下、蝙蝠が寝ていたお雪を誘き出し、学生小宮山良介がその後を逐う場面を活用したことになる。「湯女の魂」終局部に蝙蝠の魔（飛縁魔）による「連理引」のあるがゆえに「吉原雀」へ締め込まれたのである。評者は「幽玄な品作であるにも拘はらず此位にやれば成功の方だ」としているものの、典拠6は「全体があまり取合せ過ぎた

る場面ゆゑ、面白けれど味ひ無し」とし、典拠7はその景況を「人気宜しき方には無之候」と伝えている。場数は典拠6、役割は典拠3に従った。

劇の趣向からすれば、もともと「新比翼塚」は「心中もの」だが、「今戸心中」でこれに綾を加え、「湯女の魂」の怪を取り込んだのが「吉原雀」だったことになる。

「日出新聞」（明治四十二年五月十二日付・七面）と典拠7「演芸画報」には、蝙蝠傘をさした花魁九重姿の喜多村の写真が載っている。

これまで再三言及しているが、「鏡花と新派」座談会（「演劇新派」八巻三号、昭和十五年三月五日）における喜多村緑郎の「泉さんのものを愛読してゐたわたくしだったので」「泉さんには無断で」「湯女の魂」だの『七本桜』だの『髯題目』だのをやりました。」との発言のうち、「髯題目」は「雪中竹」と改題されて明治三十四年一月に大阪朝日座で上演されており（補訂④参照）、「湯女の魂」も本「吉原雀」に締め込まれていることを確認できた。ただし、本上演の四十二年は喜多村が鏡花と面識を得た後であり、「無断」での上演は大阪時代（明治二十九年―三十九年）にさかのぼる可能性がある。残る「七本桜」も、作者に「無断」ゆゑに改題のうえ上演された公算が大きく、今後調査を続けて確認を果したい。

なお、喜多村以外では、明治三十六年八月に藤澤浅二郎一座による「七本桜」上演の予報を確認している（補訂④参照）。

明治四十二年（一九〇九） 己酉 三十七歳

七月 二十三日付「読売新聞」（五面）の「文壇はなしだね」で、鏡花夫妻の甲武線の汽車にまつわる話が紹介された。

【典拠】「文壇はなしだね」（「読売新聞」明治四十二年七月二十三日付・五面）

●此は泉鏡花氏が逗子から東京の今の土手三番町の宅へ転居して来た当初の

こと或日夫人同伴で日本橋辺へ買物に来ての帰途に、お茶の水の停車場へ入って甲武電車券を買って、プラットホームで待つてゐたが、何時まで待つてゐても、汽車ばかりで、電車がやつて来ないので、遂う我慢し切れず、「ね、貴方、汽車でも拘はないのでせう。」と夫人が言ふと、鏡花氏も「然うだね、大丈夫だらう。」とずっとふるい昔の慣例を覚えてゐたので、まよと汽車へ乗って終つたまでは好かつたが、さて降りねばならぬ市ヶ谷見附まで来て、汽車は用捨なしにズン／＼行つて了つた。鏡花氏も夫人も気が気ではない、仮し急行でもあつたら何処まで持つて行かれるか知れたものではないので、腰を浮かしてハラ／＼してゐたが、するうち四谷見附まで行つてやつと停つたので、息をふき返した鏡花氏、以来外濠を通つてゐる汽車を見ると身顛ひするのださうだ。

【注記】

「年譜」にも記したが、鏡花が逗子を引揚げて土手三番町へ転居したのは、この年二月。十九日には、後藤宙外と坂元三郎（雪鳥）宛に転居を知らせる葉書を送つており、三月一日発行の「新小説」には転居の告知が載つた。

里見淳の「泉鏡花」（『海』通巻九十五号、昭和五十二年三月一日）に「土手三番町、市ヶ谷見附の坂をちよつと上がりかけて、右に曲がつた横町だが、その前もちよくちよく通つていた。」とあるのにより、おおよその位置が判る。

話題となった当時の鉄道事情を説明すれば、明治三十六年三月着工の甲武鉄道（民営）飯田町―中野間の電化工事が完成し、三十七年八月二十一日から同区間内で電気車と蒸気機関車牽引列車との併用運転が開始され、同年十二月三十一日に飯田町―御茶ノ水間、四十一年四月十九日に御茶ノ水―昌平橋間が開通したのである。本エピソードは、この「電車」と「汽車」の併用運転を踏まえて初めて理解される。

民営甲武鉄道時代に始まったこの併用運転は、三十九年十月一日の国有化以降も引継がれて、国鉄最初の電化区間となり、汽車もまた各駅に停車していたが、国有化に先立つ三十九年六月十一日、中央東線岡谷―塩尻間が開通して篠ノ井線に連絡し、飯田町―長野間の直通列車運行に伴うダイヤ改正により、市ヶ谷駅、信濃町駅を通過する汽車のあるダイヤとなった。そのため、逗子滞在中でダイヤ改正を知らずに「ふるい昔の慣例を覚えてゐた」鏡花が、「電車」ではなく「汽車」に乗り、自宅最寄の市ヶ谷駅を通過したのに肝を冷やしたのである。

しかし、この記事には疑点がないわけではない。四十二年七月の時点で、新宿方面行き「電車」の始発は昌平橋、「汽車」の始発は飯田町であり、御茶ノ水駅に汽車は走っていないこと、第二に、電車は頻発営業（シャトルサービス）により約七分間隔で運行していたのに対し、汽車は六十分乃至九十分間隔の運行で、「汽車ばかりで、電車がやつて来ない」状況はまず考えられない点である（以上、「飯田町長野間直通列車運転」広告「都新聞」明治三十九年六月十一日付・四面、電気車研究会編刊『国鉄電車発達史』昭和三十四年三月二十日、中川浩一「国電80年を総括する」『鉄道ピクトリアル』三十四巻八号、昭和五十九年八月一日、大塚和之「甲武鉄道東京市街鉄道線電気運転100年―その1―」『鉄道ファン』五二四号、平成十六年十二月一日、等を参照）。

「甲武鉄道の電車」（『読売新聞』明治三十九年九月十五日付・三画）に「お茶の水中野間に使用する電車は」「運転回数を増加し毎日午前五時を始めとして午後十一時三十分を終りとし往復百八十回を運転する都合となれり此間に約廿回の汽車運転あれば合して二百回は運転せり」と報じられているのも参考になる。

ほぼ同じ時期に発表された森田草平の「煤烟」二十の三（『東京朝日新聞』明治四十二年四月五日付・三画）には、主人公小島要吉が夜の御茶ノ水から水道橋まで「電車」に乗る場面に、「電車は幾台も着く。直方向を転換しては又発車する。」とある。作品内の現在は明治四十一年の年明けのこととされており、昌平橋駅開設以

前、御茶ノ水駅で折返し運転していたころを反映した描写だが、引用のように、運行間隔は短く、典拠記事のような「電車がやって来ない」状態ではない。折返し昌平橋でも事情は同じであろう。

おそらく「はなしだね」の記者は、三年以上東京を離れていて鉄道事情に疎かった鏡花の狼狽ぶりを強調せんとして話を構えたと思われるが、なお当時の併用運転の実態について調査を続けたい。

明治四十二年（一九〇九） 己酉 三十七歳

八月 一日付「読売新聞」（六面）の「日曜談叢」に「尾崎紅葉が独歩社の人達の悪口を言った」という話（同紙七月二十二日付「文壇はなしだね」）の出処が鏡花である、との記事が載った。

【典拠1】「日曜談叢」（読売新聞）明治四十二年八月一日付・六面

▲先日の本紙の「文壇はなしだね」に尾崎紅葉が独歩社の人達の悪口を言ったと云ふ記事に対し「阪本紅蓮洞氏から怒つて来た」、「日曜談叢」は「文壇はなしだね」とは領分が違ふから此処で正誤するのは当を得て居ないが友人の頼みだから出して置く、独歩社の出来たのは二三年前の事で此時分には既に紅葉は独歩の追悼法会の席上で演説をした赤坂の円通寺の住職なるものに引導を渡されてから四五年後の事であるが幽霊でも出て来て悪口を云ふならいざ知らず本物の紅葉が悪口を言ふ理屈はない筈、実はあの話の出処は泉鏡花との事、して見れば此れは例の神秘的の筆法から来たものだらう

【典拠2】「文壇はなしだね」（読売新聞）明治四十二年七月二十二日付・五面

◎中元で思出したが、之は故尾崎紅葉氏が存生中のこと、何でも独歩社が何処かへ、稿料の前触が非常に仰山で、さて中元になると五円紙幣一枚だけを包んで来た。利かぬ気の紅葉氏は、其を直ぐ風月堂の五円切手にして中元

の返礼にしたさうだ。

【注記】

「日曜談叢」は坂本紅蓮洞（慶応二年九月二十四日生、大正十四年十二月十六日歿、享年六十）の抗議により「文壇はなしだね」の記事の誤りを指摘したあと、その話の出処を鏡花だとする。しかし「文壇はなしだね」は、独歩社の中元に利かぬ気を起した紅葉のエピソードであって、紅葉が直接に独歩社の「悪口」を云ったという内容ではない。

中元の金額「五円」は、紅葉の「金色夜叉」連載当時の稿料が五円と伝えられることに由来するのではなからうか（この金額は、のち「明治大正昭和文芸座談会」「文芸春秋」十一巻五号、昭和八年五月一日、および「明治文壇を語る座談会」「現代」十五巻三号、昭和九年三月一日、等の座談会でも話題に上っている）。連載一回分の金額を中元とした独歩社に我慢ならず、同額の金券を突き返したという話が誤報であるのと同じように、話題の出処が鏡花であるかどうかも定かではないが、エピソードの素地には、かつての硯友社系・民友社系の作家の対立が踏まえられているのであろう。独歩の晩年、紅葉門下の小栗風葉や柳川春葉は龍土会を通じて独歩に接近していたから、紅葉に最も近い鏡花がこの話の提供者にされたとも考えられる。

坂本紅蓮洞は近事画報社に在って、独歩の「近事画報」に対し「美観画報」の編輯をしていた。日露戦後、経営不振の同社を引継いで「独歩社」の設立されたのが明治三十九年六月、さる三十六年十月に逝去した紅葉との交渉が成り立つはずもないから、独歩社にも出入していた紅蓮洞が「怒つて来た」のは当然であった。紅蓮洞と独歩との関係は、歿後の「読売新聞」（明治四十一年六月二十五日付・三面）に「坂本易徳氏談」として載る「独歩氏の遊振り」、同じく本名で書いた「近事画報社時代の独歩」（趣味）三巻八号、同八月一日）に詳しく、独歩社以来、交友を重ねた窪田空穂の『濁れる川』（国民文学社・抒情詩社、大正四年五月五日）に

は、「つむじ風来るかに似ては紅蓮洞あらはれ来り世をし罵る」以下、紅蓮洞を詠んだ十一首を収める。また水上瀧太郎の追悼文「紅蓮洞」(『第四頁殺追放』大岡山書店、昭和四年七月一日)が彼の人となりを語って余蘊無く、佐々木光「グレさんという人 明治大正文壇名物男・坂本紅蓮洞」(『日本古書通信』六十三巻十号、平成十年十月十五日)が生涯の全体を展望した文として貴重である。

鏡花と紅蓮洞とは、大正三年七月十二日画博堂主催「怪談会」での同席が認められる(「年譜」参照)。

「はなしだね」の記事は独歩の一周忌後の話題を供するために書かれたものと思われるが、一周忌の法会は、明治四十二年六月二十三日午後三時より、赤坂一ツ木円通寺で営まれた(『時報』「新小説」十四年七巻、明治四十二年七月一日、および「文芸消息」「早稲田文学」復刊四十五号、同八月一日)。同寺の住職は前年の葬儀の際にも導師を務めた中里日勝である。独歩と紅葉との関係においては、紅葉歿の前年『現代百人豪』(新聲社、明治三十五年四月十八日)で「尾崎紅葉」を担当した独歩が紅葉の前期の文学(「伽羅枕」「三人妻」)を「洋装せる元禄文学である」と断じたことが遍く知られているが、『欺かざるの記』後篇(隆文館・左久良書房、明治四十二年一月五日)に拠ると、民友社時代「国民之友」の編輯に携わっていた独歩は、明治二十八年六月二十二日の午後、同誌夏期附録への寄稿を依頼すべく紅葉の許を訪れている。これを受けた紅葉は小西増太郎の訳稿に手を入れて、八月二十三日発行の第二五九号から小西との共訳でトルストイ原作「名曲クレイツェロワ」(クロイツェルソナタ)を連載した。

独歩と紅葉との交渉は、かく編輯者と作家との関係から始まったので、「はなしだね」の記事はあながち無稽とも言えぬのである。

明治三十六年十一月二日、青山斎場で行われた紅葉の葬儀の会葬者は三百余名と伝えられるが、そのうちに国木田哲夫の名前を見出すことができる(「二六新報」

明治三十六年十一月三日付・三面)。このとき門生一同を代表して鏡花が読んだ弔詞を独歩も聴いていたはずである。徳富蘆花「国木田君の「我」」(『趣味』三巻八号、明治四十一年八月一日)によれば、紅葉葬儀が終わってから蘆花のところを訪れた独歩は、蘆花になぜ葬儀に行かなかったのか、と詰問したという。

また、独歩は第三回紅葉祭(明治三十八年十二月十六日)にも出席、寄書の葉書を田村三治宛に送っている(学習研究社版『定本国木田独歩全集』別巻、昭和五十三年三月一日増訂版)。

両声会(第二回、明治四十年十月十八日)での同席のほかに、独歩と鏡花との交渉の実態はいまだ明らかにできていないが、かつて独歩作「牛肉と馬鈴薯」と鏡花作「祝盃」の会話体の対照について触れたことがある(「解説」岩波書店版『新編泉鏡花集』第三巻、平成十五年十二月五日)。先述のように、同門の風葉や春葉が晩年の独歩と交流を持ったのに対し、豆子滞在中であった鏡花には交渉の契機が生じなかったと考えられる。

明治四十二年(一九〇九) 己酉 三十七歳

十月 二十一日付「読売新聞」(五面)の「文壇はなしだね」に、鏡花の「強記」のさまが報じられた。

【典拠】「文壇はなしだね」(『読売新聞』明治四十二年十月二十一日付・五面)

◎泉鏡花君は非常に強記な人で十二三年前の些と会った人でも名も覚えてゐれば顔容まで忘れない(『泉鏡花』) 明治四十二年十月二十一日付・五面
が来ると直ぐに鏡花君に占はせたものであるが其辺からの推測だか何うか先頃或る新聞に出た文士の遊び振りを書いた記事の中には本人さへ忘れてゐた女の名まであるので「屹度是は鏡花から材料が出たのだ」との噂が盛んにある

【注記】

鏡花作品の生成を理解するうえで、この「強記」は見落すことのできぬ資性であろう。

明治四十二年（一九〇九） 己酉 三十七歳

十一月二十九日付「毎日電報」（四面）に、翌月一日からの講釈師大川

新による「風流線」の口演（於牛込大和亭）が報じられた。

【典拠】「演芸」（毎日電報）明治四十二年十一月二十九日付・四面

▲大川新の風流線 来月一日より牛込大和亭に於て大川新は眉山の神出鬼没、鏡花の風流線外一席を演ずる筈にて助演は如燕々国なりと

【注記】

右の報は、吉沢英明編刊『講談明治編年史』（昭和五十四年三月。刊行日記載なし）に録されている。

所演の大川新はのち大谷内越山と改名した。三省堂版『日本芸能人名事典』（平成七年七月十日）に、

明治一八（八六巻）八一昭和二一（二五巻）一・二〇 明治昭和期の講釈師・宗教家。新潟県長岡生まれ。本名は新吉。もと中学教師から講釈界にはいり明

治四〇年代に二代桃川如燕門で大川新と称した。ほどなく大谷内越山と改名し、内外の文芸作品を講談化して評判となった。大正期に講談革新運動の旗手として活躍。家庭の不幸がつづいてしだいに社会事業や宗教に関心が移り、昭和二年（二五七）仏門にはいって、事実上引退した。

とあるが、右「毎日電報」の報と同月十七日付「東京朝日新聞」（七面）には、

▲大川新の不遇 中学の教授であったといふ大谷新は小さんに頼んで落語家となり次に浪花節へも首を突込んだが思はしくないので大川新と改め講談

の正義派へ加入してコック／＼叩いてゐるが一向に意気が昂らない心柄とは云へ先生の不遇また同情すべきである

との記事が見える。「不遇」はこの講釈師の宿業だったようである。

後の大正二年、「新小説」一月号（鏡花「五大力」掲載）の附録「講談と落語」に越山による「風流線」の口演筆記が載っており（「年譜」記載済み）、同年四月二十六日付「東京二六新聞」夕刊三面にも「第二回越山会」として、日本橋木原亭での「風流線」、露伴作「五重塔」、越山自作「維新三傑」の口演予定が報じられている（吉沢英明編刊『講談大正編年史』昭和五十六年一月。刊行日記載なし）。

「風流線」の初演は、明治四十年七月の本郷座（十四日初日。佐藤紅緑脚色。出演喜多村緑郎、藤澤浅二郎、中野信近ら）であるが、講釈によっても口演されていたのである。

川上眉山の「神出鬼没」は明治三十三年「二六新報」連載（七月二十七日―十一月二十九日）後、三十五年青木嵩山堂より二分冊で刊行（前篇一月四日、後篇九月一日）された。

席亭の大和亭は、牛込山吹町にあった釈場である。

鏡花作品の上演といえば、従来は専ら演劇や映画が取り上げられてきたが、本項のごとく話芸による上演にも注意を払う必要がある。

いまだ調査が行き届いていないものの、一例を挙げれば、明治三十八年六月の「新潮」（二巻七号、十五日発行）掲載、女流噺家・若柳燕嬢の談話「はなし家の小説観」には、

私が高座にかけました数々の小説の中で、最も喝采を博したのは何を云つても紅葉さんの「取舵」ですね。あれならどんなワイ／＼連でも静粛に聞いてくれますよ。大阪のやうなあんな淫靡な土地でも大喝采でした。（…）幸田先生の一口劔なども大喝采ですね。然し又あれはどうも講談風に出来てます

から、私の身になると演り悪いことは一通りぢや有りませんでした。

そりや妙ですよ、土地くによりましてね、(…) 本所深川と来ますと場所柄だけにコウいさみな者が好いんですね、(…) 鏡花さんの「湯女」は下宿屋へ這入る処まで演ります。

とある。「最も喝采を博した」「紅葉さんの「取舵」は紅葉名義で発表された鏡花作品であり、「湯女の魂」は明治三十三年三月の文学者講談会での鏡花自身の口演ののち、「新小説」五月号に載った。「下宿屋へ這入る処」は最終十九章だから、ほとんど全編の口演ということになる。

燕嬢のことは尾崎紅葉の「病間記」明治三十六年二月七日の条に「夜新芸林表紙を携へわら店亭の主を訪ひ始めて燕嬢の講談を聞く」と見えている(「わら店亭」は牛込区袋町三番地の寄席。四十一年一月に和良店演芸館と改称)。『女優かぐみ』(杉浦出版部、大正元年十一月三日)によれば、燕嬢の本名は藤生操子、明治十一年十月東京芝生れ、女流英学者藤生貞子の妹で、書生芝居の役者座光寺天卿(本名千葉秀甫)と恋に陥り、若柳燕嬢と名乗って三遊派より寄席に出たのち、千葉と別れて女優に転じ、三崎座や新富座に出演、今は壮士役者静間三郎と夫婦になり、名古屋に居る、という。当り役は「金色夜叉」の宮、ともあるが、歿年は確められない。

また「泉鏡花座談会」(昭和二年八月)では、鏡花の「金時計」と云ふのを落語家がやつたのを御存知ですか」との問いを受けた久保田万太郎が「川上秋月ですか、最近私は動坂の或寄席で聞いたが、」と答えている。「金時計」の寄席での口演を鏡花も承知していたのである。川上秋月は『日本芸能人名事典』に、

明治六(一八三三)三・七―昭和一八(一九四三)一・二〇 明治く昭和初期の寄席色物芸人。本名は平井芳之助。一説にははじめ初代笑福亭福松の門で笑福亭勢楽。その後川上首一郎一座にはいり川上元次郎。明治三〇年代には川上秋月の名で新講談に転じ、色物寄席でお題噺(客から品物を借りそれを洒落な

から話をまとめる)を十年一日のごとく演じた。昭和七年(一九三二)ごろには高座から引退していた。

と出ている人物である。

今回は時日を特定できる大川新の「風流線」の場合のみに止まったが、上記若柳燕嬢や川上秋月らの口演の実態について、今後立項できるよう調査を進めたい。

明治四十二年(一九〇九) 己酉 三十七歳

十二月 十一日付「読売新聞」(五面)の「文壇はなしだね」に「小石川の知人」を訪ねたおりの逸話が報じられた。

【典拠】「文壇はなしだね」(「読売新聞」明治四十二年十二月十一日付・五面)

●泉鏡花君此程小石川の知人を訪ぬる時わざわざ砲兵工廠から明るい表町の方へ迂回して行つたが其の家に着いた時の顔はまるで青菜のやうだったといふ。氏ほど夜を怖れるものは有るまいとの事だ。

明治四十三年(一九一〇) 庚戌 三十八歳

六月 十八日付「読売新聞」(五面)の「はなしだね」に、二葉亭四迷と鏡花のことが報じられた。また、坂元雪鳥によれば、生前の二葉亭を誘って逗子滞在中の鏡花を訪ねたことがあった(明治四十一年の春力)という。

【典拠】「はなしだね」(「読売新聞」明治四十三年六月十八日付・五面)

●故二葉亭は鏡花君に向つて私がもし日本の小説を外国へ紹介する場合には第一にあなたのを訳さうと思ふ貴君の作は誰よりも日本の特色が出てゐると言つたさうが不幸にして二葉亭は其企を果さずして死むだ鏡花君は今でもまだ其事を言つて居る

【典拠2】 坂元雪鳥「書齋（てい）の思ひ出」〔書齋〕創刊号、大正十五年二月十五日

◇鏡花氏の逗子の僑居

家の前を通りかゝつたから、その頃逗子にゐた泉鏡花氏の書齋へ長谷川二葉亭氏を引張り込んだ。春ではあつたが寒い日であつた。今のやうにブー／＼自動車を通るではなし、通りに面した二階でも別に砂利に軋る轍の音も聞えなかつた。

御用邸道に面したいはゞ長屋建の家であつたから、さしたる設備がある訳もなく、六畳かの表二階が主人公の書齋であつた。茲であの玄妙不可思議な想像を逞しうして彩管を揮ふのかと思ふと、極端に殺風景な新聞社の編輯室で物を書いてゐた身にも、いさゝか意外の感なきを得なかつた。

その室の印象として残るものは、思ひ切り小さい机、その上には土佐改良半紙が丁寧に展べられて卦算を置いてあつた事と、その室（つむぎ）に少し不釣合な猫脚の御殿風の火鉢が据ゑてあつた事とであつた。この机も火鉢も六番町の住宅へ移つて来た筈である。

思ひ出すのは、その時鏡花氏が本棚から不似合千萬な洋書を取り出して、これは戦争から帰つた男が分捕品だといつて呉れたのだが、未だ何の書だか読んで貰つた事がないといつて、露語に明るい二葉亭氏の前に差置いた。それは経済学の本であると宣告されて、主人は勿論坐に列なつた私まで啞然たらざるを得なかつた一事である。

【注記】

従来、二葉亭四迷と鏡花との関係については、神田謹三（本名田島金次郎）の「二葉亭と鏡花」（岩波書店版「鏡花全集月報」十三号、昭和六年十一月）以外にほとんど言及をみない。

典拠1は、神田文と同趣の翻訳をめぐる両者の片々たるエピソードであるが、

逗子滞在中、坂元雪鳥を介してその交流のあつたことを具体的に示すのが典拠2である。各々時日を特定できないため、一括して本項にまとめた。

同門小栗風葉、柳川春葉、徳田秋聲の三人が出席した二葉亭渡露送別会（明治四十一年六月六日、於上野精養軒）に欠礼した鏡花だが、すでに「年譜」にも記した通り、四十二年六月二日の染井墓地における二葉亭の葬儀に列席しているのは、こうした交流の証であらう。

典拠2の筆者雪鳥坂元三郎（明治十二年四月二十五日生、昭和十三年二月五日歿、享年六十。柳河藩士白仁成功の三男、福岡生れ。明治四十一年、鹿児島（鹿）の医家坂元常彦の養子となる）は能楽評論家として知られるが、旧姓白仁の頃から鏡花と親交があり、逗子より発信の書簡下書（番号42。白仁三郎宛）と、逗子から土手三番町への転居通知の葉書（番号二二八。明治四十二年二月十九日付、坂元三郎宛）が残っており、また非公開資料ながら、許斐慧二氏のサイト上に、明治四十一年三月二十四日付（前記書簡下書42の清書簡）および明治四十四年八月五日付の書簡二通が公開されていた（<http://ai.lai.kyutech.ac.jp/staff/konomi/izumi.html>）。許斐氏は、その姓からして雪鳥が大正十二年八月に再婚した許斐八千代の縁者かと思われる（坂元先生年譜略）日本大学国文学会「国学」八輯、昭和十三年七月十七日）。現在のこのサイトは閉じられていて閲覧できないが、今後翻刻公開されることを望みたい。

文中「春ではあつたが寒い日であつた」という二葉亭を伴つた雪鳥の鏡花訪問は逗子時代（明治三十八年夏―四十二年二月）のいつごろなのか。二葉亭四迷の渡露するのが四十一年六月であるから、三十九年より四十一年までの間になる。

さらに絞り込めば、雪鳥の「夏目先生を憶ひて」（能楽十五巻二号、大正六年二月一日）の「先生の朝日入社当時」の章は五高時代の弟子の縁から入社を周旋した経緯を記す文章だが、漱石への交渉に際し、西片町漱石宅と至近の二葉亭宅に社の洪川玄耳（柳次郎）と弓削田風浪（精一）が待機して、雪鳥の報告を待つており、

主人二葉亭氏と玄耳氏風浪子の三人は、大分待つたらしかつた。(…)話しの都合を其所で述べた。此企を今日はじめて聞いた二葉亭氏は、夫は面白いく、ト喜んで居た。私が同氏とオチ／＼口を利いたのは是が始まりであつたとある。この日は、集英社版『増補改訂漱石研究年表』(昭和五十九年六月二十日)によれば、明治四十年二月二十四日である。

したがって、逗子行きは四十年か四十一年のことになるが、口をきき始めてすぐに逗子へと誘うのは難しかろうから、四十年よりも四十一年が有力である。年次の特定について今後さらに調査を進めたい。

「はなしだね」が伝える翻訳の話は鏡花に限ったことではなく、夏目漱石「長谷川君と余」(坪内逍遙・内田魯庵編『二葉亭四迷』易風社、明治四十二年八月一日)には、二葉亭の披露の内定した頃に午餐を共にした際「露西亜へ行つたら、日本人の短篇を露語に訳して見たいといふ希望」を述べた、という。

鏡花作品の翻訳は実現しなかったが、四十一年一月以降に、二葉亭はロシアからの亡命者L・ポドパーフ主宰の「東洋」誌上に、森鷗外「舞姫」、国木田独歩「牛肉と馬鈴薯」、正宗白鳥「塵埃」等の露語訳を載せているので(掲載誌は現存せず、草稿のみ残る)、この「はなしだね」の記事には相応の根拠があるものとしてよいだろう。

〔付記〕

本「補訂」以外に、明治三十二年一月の伊藤かずとの出会い、大正十五年の金沢帰郷について、やや詳しい検討の結果を「鏡花「年譜」上の存疑」(『論集泉鏡花』第五集、和泉書院、平成二十三年九月二十日)として発表した。併せてご参看いただければ幸いである。

資料の調査に関しては、国立国会図書館、日本近代文学館、本学図書館近代文庫のお世話になった。記して深謝申し上げる。

(よしだ まさし 日本語日本文学科)